

**立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）**  
**大学院生研究**  
**2008年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院			文学 研究科	日本文学 専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名		
	立教大学 文学 教授		小峯 和明 印		
<b>自然・人文の別</b>	自然 ・ 人文		<b>個人・共同の別</b>	個人 ・ 共同 名	
<b>研究課題名</b>	中世神話の研究—ヒルコを中心に—				
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科日本文学専攻前期二年		金 英珠 印		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科日本文学専攻前期二年		金 英珠		
<b>研究期間</b>	2008 年度				
<b>研究経費</b>	200 千円				

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

中世になって著しい変貌を遂げる神「ヒルコ」を取り上げて、その原形および、変貌の経緯とその原因について考察を行うことで、中世に新しく生成する神話群—中世神話—の特徴と意義を見つけようと試みた。その結果、「中世神話」は、新しい時代の新しい神話を求める人々の必要に応じて、神話的思想から生まれた神話であり、実際の生活のなかで機能した生きた神話であるという結論を出すことができた。日本の中世神話のような神話は、ヨーロッパや韓国にも類似する例がみられることも確認できた。全世界的に、人類の神話的思想は中世神話たるものを生み出していたのである。ということから、中世神話は、日本神話の研究だけでなく、神話の本質を考えるにおいても、よいヒントになると考えられる。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 神 話 ] [ 中 世 ] [ ヒルコ ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

神話は、神聖なる神々の物語である。このことかあら、一切修正されることなく、伝授される物語であると思われやすいが、実は時代の変化に一番敏感に反応して、変化しつづける。神話は人々の信仰のもとになる物語であるために、どんなジャンルよりも、当時の価値観や思想が強く反映されているのである。たとえ、変らぬテキストを以って伝授される神話であっても、テキストの解釈が変わることによって、違う物語として享受されるのである。「生きた神話」として機能しつづけるためには、このような変化は必需不可欠なものといえる。

私が「中世神話」に注目する理由は、中世神話を生きた神話と思うからである。中世神話は、中世に作成された、おびただしい注釈書・神道書・寺社縁起・本地物語などに含まれる、宇宙の創世や神々の物語・言説をいう。山本ひろ子が著書『中世神話』で述べているように、そのほとんどが、自立した作品ではなく、断片的記事にすぎないにもかかわらず、これらを中世神話と命名しうるのは、記紀神話や仏教神話などの、先行する神話物語に取材し、すべからくそこから出発していること、またその営み一神話的思考一が、神道書や縁起・物語という作品世界を根底で支えており、中世の宗教思想の一大潮流と考えられるからである。中世神話は、中世の信仰世界、つまり、当時の神話的思考から生まれてきて、現実のなかで機能した、「生きた神話」なのである。

ヒルコは「記紀」の神代において、伊弉諾尊と伊弉册尊の二神のあいだに生まれた神である。尊い身分の神子でありながら、三年が経っても足が立たない不具児であったために、親神によって海に放棄される。流されたヒルコは二度と登場することなく、そのまま記録から消えてしまう。このように、無力で哀れな神だったヒルコは、中世になると、海を司る神一エビス一になって帰ってくる。棄てられる哀れな神から、厚い信仰を受ける神へと、著しい変貌をとげたのである。

本研究では、中世になって、劇的な変貌をとげたヒルコを取り上げて考察することで、記紀神話に集中されてきた現状から視野をひろげ、中世神話の再発見を目指す。古代から中世までのヒルコ神話を考察することによって、ヒルコ神話の原形および、変貌の経緯とその原因について考察を行うことで、中世に新しく生成する神話群一中世神話一の特徴と意義を見つけようと試みたい。

第一章では、古代のヒルコをテーマとして、平安期のヒルコを考察した。まず、「記紀」のヒルコについて考察を行い、先行研究を踏まえながら、ヒルコの原形との記紀神話における意義について私見を述べた。ヒルコは記紀編纂過程で作り上げられた神であり、アマテラスの「負」の部分に神格化したものと想定し、「祓え」の機能がヒルコの意義であるとしたのである。そして、「記紀」成立後のヒルコ像の変化について考察を行った。考察の結果、儒教的価値観の影響下で行なわれた日本紀注釈の影響を受けて、ヒルコは「穢れ」「負」なる性格が強調されるようになり、本来の神聖性を失って、神ではない穢れの存在に変わっていたことがわかった。このような、「穢れ」の存在・「哀れ」な存在としてのヒルコ像は、日本紀の注釈書だけでなく、平安

**研究成果の概要 つづき**

期の文学作品のなかでも確認することができた。そのなかで、ヒルコ享受においての『源氏物語』の意味に注目し、『源氏物語』の貴種流離譚的性格の検討を通して、『源氏物語』が流されて「帰ってくるヒルコ」という新しいヒルコ像を成立させた可能性について述べた。

第二章では、中世のヒルコーエビスと習合して帰ってきたヒルコーについて論じた。新しいヒルコ神話—エビスの本地説—を語る資料を、初見資料から時代順に検討しながら、ヒルコ神話の展開とその位相の究明を試みた。新しいヒルコ神話は、西宮神社を中心に成立して広まったものであること、エビス信仰の成長のほかにも、語り物や歌学書が、新説の拡散に影響していたことがわかった。ヒルコ＝エビス説が世間では厚い支持を受けていたにもかかわらず、日本紀注釈書や神道書は、この説を俗説と評価し、認めようとしなかったことの原因についても検討を行った。ヒルコとエビスのどちらに原因があるのかは不明であるが、両神を同一視することに抵抗を感じていたのは間違いないと思われる。

第三章では、ヒルコとエビスが習合した原因について考察した。まず、新しい神話を産んだ産室である西宮神社について、その歴史と周辺関係、勢力の基盤になる信仰者たちを中心に検討を行った。その結果、西宮神社としても、エビスを信仰する集団にしても、中世は新しい神話を必要とした時代であったことがわかった。ヒルコとエビスの類似点・共通点についても考察した。両神は、海との関連性のほかにも、異人的性格、つまり、「穢れ」と「神聖性」に代表される両義性を持っていることを明らかにした。そして、新しい神話の要求に応じて生まれてきたのが、エビスの新本地説、ヒルコ伝承であるという結論を出した。この第三章では、中世ヨーロッパに登場した「創作神話」と日本の中世神話の比較を行って、中世神話に対する新しい視覚の提案も試みた。

第四章では、これからの課題を提示する意味で、ヒルコ神話との類似点がみられる韓国神話を紹介し、簡略な比較を行った。両国が、古代から交流がある、互いに影響し合ってきた関係であることを考えても、日韓神話の比較研究は、両国の神話研究にとって、必要なものと考えられる。

このように、本研究では、中世に著しい変貌をみせる「ヒルコ神話」を取り上げて、その原形からはじめ、変貌の経緯と原因について考察を行った。ヒルコ神話の研究を通して、中世神話の特徴と意義を見つけようと試みてきたのである。その結果、「中世神話」は、新しい時代の新しい神話を求める人々の必要に応じて、神話的思想から生まれた神話であり、実際の生活のなかで機能した生きた神話であるという結論を出すことができた。日本の中世神話のような神話は、ヨーロッパや韓国にも類似する例がみられることも確認できた。全世界的に、人類の神話的思想は中世神話たるものを生み出していたのである。ということから、中世神話は、日本神話の研究だけでなく、神話の本質を考えるにおいても、よいヒントになると考えられる。